

令和6年度 第1回 不登校児童生徒等の学びの継続支援に関する懇談会要旨

- 1 日時 令和6年6月12日(水) 13:00～15:00
- 2 開催形式 Web 会議サービス Zoom によるオンライン開催(ホスト会場:県庁8階教育委員会室)
- 3 出席者 荒井座長、近藤委員、宮坂委員、小松委員、村上委員、高坂委員、鳥谷越委員、甘利委員

4 内容

- (1)開会
- (2)あいさつ(教育次長 曾根原 好彦)
- (3)構成員紹介
- (4)報告・協議
 - ①はばたき Vol.3作成の方向性について
 - ②県内市町村の教育支援センターの取組について
 - ③高等学校における多様な学習ニーズへの対応について
- (5)御礼のあいさつ(次世代サポート課長 馬場 武親)
- (6)閉会

【協議の要旨】

<県内市町村の教育支援センターの取組について>

発言者	発言要旨
荒井座長	<p>事務局から、長野県内における教育支援センターの取組事例について情報提供いただきました。ご参加いただいている委員の皆様にとっての受け止め等をお伺いします。</p> <p>最初に、保護者の立場で甘利委員からお伺いしたいと思います。</p> <p>佐久市を中心として様々な活動を展開され、当事者のお立場から行政とも連携されてきたご経験があると思います。これまでの教育支援センターの状況の認識や困り感や今後の課題等があれば、お話しください。</p>
甘利委員	<p>まず、今回頂いた資料の中の印象ですが、〇〇教育支援センターと名前が連なっていると、とても硬い気持ちで、資料を拝見しました。</p> <p>ほっこりしたのが、千曲市さんの「たんぼぼ、アプリコット、つばさ、ひまわり」です。とてもほっこりして、すごく温かい雰囲気のある場所のように感じました。</p> <p>実際に特別支援学校に通っている保護者の方が、「養護学校という名前から特別支援学校という名前が変わったけれど、通学するバスは養護学校なんだよね。ここは何とかならないのかなあ。」という言葉を実際頂きました。本当にお母さんたちはそういったところからすごく敏感に感じられているので、そういったやんわりした言葉も大切と感じています。</p> <p>教室に通うには交通手段がとても大事です。通学にお金がかかってしまっただけではやはり負担になります。子どもが行きたいと言っても、行かせられない環境であるのがすごく残念です。先程お話ししていただいた SaSaLand が送迎に関してもすごく考えてくださっているようで、すばらしいと思います。</p> <p>小学生から中学生までの生徒が一つの教室で学べるメリットというのはものすごくあると思います。</p> <p>うちの息子は、中学で入りましたが、高校にステップアップして行く先輩たちを見て、「僕も高校に行けるかも」という気持ちをもって高校に進学して行きました。低学年ぐらいのお子さんたちが、お兄ちゃん、お姉ちゃんのように成長して行く姿を見ながらはばたいていける、希望をもてるというのは、とても素晴らしい環境だと思います。</p>
荒井座長	<p>非常に網羅的に、論点に目配せいただいたのではないかと聞いておりました。</p> <p>一つ目は、名称について。子どもの眼差し、あるいは子どもの立場から捉えた場合に、「中間教室」という名称よりは余程よいと私は個人的には思いますが、「教育支援センター」という名称の硬さというところですか。新設されている教育支援センターには、愛称がつけられているようなところも多いです。例えば、松本市では新たに教育支援センターが一つ増えました。「どん</p>

	<p>ぐり」「未来」「あかり」「四つ葉」という通称名となっておりますが、センターに通っている子どもたちに考えてもらって、名称を決めたという経緯があります。</p> <p>もう一点は、ハードの側面です。利用を促していく、あるいはフレンドリーな利用を促すという意味では、送迎は重要なポイントです。後程ぜひ近藤委員には、SaSaLand のお話をお聞きしたいと思っておりますが、送迎は日々のことですので、とても重要な観点だと思います。また、給食もエネルギーという点で重要です。</p> <p>続いて村上委員お願いします。活動の拠点が茅野市あるいは諏訪地域ということで、また立場上、様々な団体との情報共有もされていると思いますので、教育支援センターの状況認識や期待感、今後の課題等をお聞かせいただけますでしょうか。</p>
村上委員	<p>まず質問の前提として、これは「はばたき」に掲載していく上で情報整理しているという質問の建て付けと考えるとよいのでしょうか。</p>
荒井座長	<p>最終的には冒頭でお話があったとおり、今回の「はばたき Vo.3」で市町村教育委員会が設置した教育支援センターの取組事例を取り上げようといった建て付けになっています。その時に、ぜひ皆さんにこの点を紹介した方がよいのではないかとか、ここが特徴的な取組だという事例の骨格や輪郭を明らかにすべく、皆様の期待感や困り感等をあらかじめお伺いして、できる限り情報を提供したいと思っておりますので、その観点からコメントをいただけたらと思っておりますが、いかがでしょうか。</p>
村上委員	<p>「はばたき」がどういうターゲットなのか、なんとなく僕の理解の印象では今までの Vol.1と Vol.2 の方は好事例集、こういう先進的な取組をしているところがあるということを紹介していると考えているので、今回も教育支援センターの中で取り上げる先進的なこととか、新しい所をとということだと思っておりますが、現場でこの「はばたき」と出会った時の感覚でいうと、ある意味先進的な取組だけに、コミュニケーションを取るプレッシャーになっているというか、「うちのところではこういうことをやってくれないのか」といった、例えば「〇〇市ではバスで送ってくれているけれど、うちでは送ってくれていない」とか、「〇〇では成績が認定されているけれど、うちはない」とか、そういう良くも悪くも刺激になっているような気がして、それが「はばたき」のねらいなのか少し不安だったので、最初に聞きました。</p> <p>茅野市もついこの間まで、適応指導教室という名前でした。ようやくここで、呼び名を変えるという動きになったのですが、私も見学に行かせていただいて、かなり生徒もしっかり通っている印象はあったので、先生たちのお話を伺ったところ、圧倒的に中学3年生の子が多いということでした。</p> <p>課題としては、市内一か所、駅の方に近い永明中学校のそばにあり、その子は断然使いやすい。逆に、他の所の子は非常に送迎が不便だということを知りました。それから給食も少し変わっていて、近くに小中学校がある場合、その子は利用できる。他の子は、お弁当を持参しなければいけないといった凸凹を感じています。</p> <p>ただ、なぜ中学3年生にそれだけ集中しているのかということがあり、やはり良くも悪くもねらいが高校受験をしっかりしていこうということに絞っている感じがあり、その噂が噂を呼んで、学校は難しいが何とか評定を取って高校から戻りたいときに選択されています。</p> <p>一覧表で色々な施設が載っていましたが、例えばこれをお母さんたち、あるいは当事者たちが見たときに、どんな施設かという情報の中に、やはり成績のことや特徴、フリースクールでいうと学び型なのか居場所型なのかといったところがわからないと期待していった内容と実際のサービス、提供されているコンテンツがミスマッチになって悪い噂になっていくといったことはあるかと思っております。だから、今お話したように、茅野市としては、そういう良くも悪くも特徴がはっきりしているので、もしかしたら他の地域も本当に場所によって全然違う色なのかと思っております。</p> <p>そうすると、その中のいくつかを取り上げて出した時に、果たしてそれがどういう影響を与えるのか。教育行政の人たちが見ると参考になるかもしれないけれど、当事者からすると、結局、うちの周りではどんなサービスがあるのかということが一番気になるのかと感じています。その辺の摺り合せを「はばたき」の中でどう説明していくのかということが少し気になりました。</p>
荒井座長	<p>今までは先進的あるいは好事例と言えるのかという評価は色々分かれるかもしれませんが、新たな子どもを中心としたチャレンジをしているところの事例を載せていくことによって、啓発といたしますか、そういったところを促していく。それぞれの学校関係者に当事者意識をもってい</p>

	<p>ただくという役割を期待してきたという部分があると思います。</p> <p>ただ、確かに今ご指摘いただいた通り、それがプレッシャーになり、逆に当事者の方からすると、サービスを提供、あるいは享受する上での比較材料にいい意味でも悪い意味でもなるというようなことで、余計その関係性として難しく出てくるのではないかという点に関しては、納得しながら受け止めました。また、どのような形がよいかという建て付けも含め、後程ご提案、あるいは次回以降ご提案頂けたらと思っています。</p> <p>続いて、高坂委員にお伺いします。</p>
高坂委員	<p>この4月より西部中に移り、塩尻市の不登校支援等大変お世話になっている訳ですが、塩尻市は教育支援センターの高ボッチ教室というところが昔からありまして、小学校の高ボッチ教室、中学校の高ボッチ教室というのがそれぞれ設置されています。</p> <p>塩尻市の子どもたちにとって、高ボッチ教室は非常になじみ深く、各学校でもそれぞれの学校にサポートルーム等設置されておりますが、学校の中のサポートルームと並行して、不登校の子どもたちが学校か、あるいは高ボッチ教室かを自ら選択をしている、その様子が当たり前でございます。</p> <p>高ボッチの方でも、私がしばらく塩尻を離れている間に色々な学習プログラムや様々な学びの形態を用意してくださっており、高ボッチで学ぶ子もいれば、高ボッチで学習することはできなくても、例えば高ボッチの遠足には参加できるとか、あるいは高ボッチから離れて少し学習をする、教育支援センター以外のところでも学習をするというような、そんな機会が設けられていると思います。</p> <p>小松先生にまたさらに詳しくご説明をいただけると思うのですが、教育支援センターという場所と支援センターの中のスタッフの方々、それから市の教育委員会の子と親の相談員とその場所に加えて、色々な方が子どもたちに教職員だけではないところで、様々に人が関わっていただいているというのは、非常に子どもたちにとっても親御さんにとっても心強いところと感じています。</p> <p>また、この「はばたき」については、先程荒井先生から学校関係者に当事者意識をもたせる目的が一つあるとお話がありましたが、令和3年度に「はばたき Vol.1」が出た時、不登校はやはり問題行動ではないのだと、生徒の意思の表れとして学校として大事にしていこうという、学校にとって教職員にとっては非常に大事なメッセージを冊子で頂いたと思っています。</p> <p>コミュニケーションシート等も活用させていただいておりますが、令和6年度、今度高校との学びの接続といったところも、また議題にさせていただくというお話がありましたので、私も学びながら、中学校の現場からの何か情報を発信していければと思っています。</p>
荒井座長	<p>先程、「はばたき」の位置付けについては先進事例とお話ししてしまったかもしれませんが、私個人としてはむしろ標準装備というか、そのテーマについて議論をしていくことを避けては通れない状況にあると認識をしているので、論点を設定させていただいているという側面もあります。</p> <p>続いて小松委員、お願いします。塩尻市を中心として学校の中にサポートルームがあったり、あるいは他の市町村でも校内フリースクール等があったりする状況の中で、教育支援センターとの棲み分け、あるいは利用される方の違いとか、こういった位置付けを改めて教えていただきたいという点と、それぞれのお子さんによって違うかと思いますが、改めてそこに勤務されている小松委員として、一日の流れとか、このような取組を普段されている、あるいは今こういうチャレンジをされているということがあれば、少しお時間をとって情報提供いただけたらと思います。</p>
小松委員	<p>私ですが、昨年度から塩尻市教育委員会でお世話になっています。今年度から嫌いだった中間教室という名称から教育支援センターになりました。昨年は高ボッチ教室の方に一日子どもたちと関わる形でいました。本年度は教育支援センターに関わる職員を増やしていただいたので、自分はその高ボッチ教室に来るお子さんと関わりと共に、コーディネーターとして地域全体で不登校支援をしていくという外に出ていく仕事が可能になりました。それが始まってまだ2ヶ月半ぐらいですが、塩尻市の取組が先程のところは無かったので、少し時間を取って紹介させていただこうと思います。</p> <p>私が昨年度一年間やってきて感じたことは、高ボッチ教室に来るお子さんですが、色々なお子さんが来るわけです。ニーズも違う、タイプも違う。そういう中で、学校と同じものをそこで</p>

作り上げてはいけないけれども、その子たち全てのニーズに沿った一日の流れというものに非常に悩みました。

例えば、ものづくりが好きな子がいるので、ものづくりの講師を呼んでそういう体験を高ボッチ教室でやろうと思っても、高ボッチ教室に来る全員の子が対象になってしまうわけです。そうすると、ものづくりが苦手なお子さんもいるので、そこで体験を企画すると苦手な子は高ボッチ教室を休むという状況が起きるわけです。こういうことに私は抵抗を感じていました。今年度大きく変わったのは、高ボッチ教室は塩尻西小学校の敷地内にあって、その隣の校舎の4階に教育支援センターで使える部屋を用意してもらい、それをチャレンジルームと名付けました。チャレンジルームで、色々な体験講座や企画を設定すれば、高ボッチ教室の子も、やりたい子はそこに行けます。

それから、高ボッチ教室にも来られていない不登校のおさんが市内を見るというわけです。学校のサポートルームも行けない、高ボッチ教室にも来られない。そういうお子さんも、チャレンジルームのこの企画だったら来られるかもしれないという可能性があるということで、今、そのチャレンジルームの講座を色々企画しています。

それと共に私が昨年度の一年間やって感じたことは、私はずっと学校現場でお世話になっていましたが、学校以外に不登校の子たちの力になりたいという思いをもっている民間の方々がいっぱいいるということです。お話をしてみると思いは共通しているのだということです。地域には色々な方々がいるので、塩尻市の中でまとまってみんなで塩尻市のお子さん、不登校のお子さんたちのサポートができないかということでやっています。

今、軌道に乗ったのが一つ、塩尻市の特徴的な取組と言えらると思うのですが、いずみ塾と連携しています。いずみ塾と塩尻市教育委員会が連携しています。いずみ塾の広丘駅前校で、週一日ですが、2時間学習サポートをいずみ塾の先生が行っています。そこに、私も市の子と親の心の支援員も顔を出しています。一緒に学習サポートをしたり、学習だけではなく、カードゲームをしたり色々なことをやっています。そこは高ボッチ教室に行けていないお子さんも、そこであつたらということで来ているお子さんもいます。

あと、塩尻市の振興公社でコア塩尻というところがあるのですが、そこにeスポーツの素晴らしい高性能ゲーム機があります。家に籠っているお子さんでゲームをずっとやっているお子さんがいるのですが、すごいゲームができるんだよということで、そこに来られるのではないかと可能性を考えました。コア塩尻とも連携をして、実際にチャレンジルームで、先日、「学校と一緒にゲームをしよう」という少し大胆な企画を作りました。正直に言うと、「ゲームを一緒に4階でやるの…」という空気を感じました。「保護者の方もいいですよ」ということで、そこに親子で来ていただいた方もいました。高ボッチ教室以外のお子さんでも22名、保護者の方が9名集まって、コア塩尻の方も来ていただいて、大画面で太鼓の達人をやったり、テトリスをやったりしました。最初は静かで硬かった子がゲームを通して表情が柔らかくなって一生懸命取り組み、「太鼓の達人を前に出てやろうよ」と言ってもやらなかった子が、だんだんできるようになったのです。

ゲームはあくまでもコミュニケーションツールの一つだと感じたのですが、大人も一緒になってゲームを楽しむことによって、色々な会話が生まれました。コア塩尻は、都市大塩尻高校のeスポーツ部がそこで部活をやるような場所なのですが、お子さんが家から出て不登校支援ができるのではないかと考えています。コア塩尻とも連携しています。

あとは、児童館に小さい子をお母さんが連れてきたりする「児童館カフェ」という取組があつて、そこに不登校の子どもたちが行っています。小さい子と関わることがすごく楽しいというお子さんが今2人位毎週行くようになりました。

また、地元に通信制高校があります。通信制高校や地域の大学の学生ボランティアとかとも連携が取れないかと、今やり始めていることです。

親の会を塩尻市教育委員会で主催しています。不登校の保護者の会を夜やっているのですが、保護者のなかには、学校だとか教育委員会に対する不信感をもっておられる方もいます。当たり前だと思うのですが、そういうお母さんたちとも仲良くなりながら、みんなで子どもたちに関わっていける、そういうコーディネーターとしての役割がこれからはできればいいのではないかと考えているところです。

荒井座長

親の会というものの繋がりというのも非常に面白い、重要な取り組みだと感じました。

<p>宮坂委員</p>	<p>では、続いて宮坂委員にお伺いします。</p> <p>私自身まだこの職について1年なのですが、実は退職後の6年前から教育委員会にお世話になり、最初は子ども総合相談センターという就学支援や不登校に対するお子さん等と関わる係をしていました。</p> <p>自分が現職の頃からもそうなのですが、不登校支援について一番大事にしていたことは、人と人が関わる居場所を作ってそこで待っているのではなく、どうそこまで繋げていくのか、そこに繋げるまでの人と人の繋がりというところを一番大事にしないと、特に長期欠席のお子さん等については難しいのではないかと、そんなことを自分の関わり、関わった経験等の中から感じておりました。</p> <p>今回この職に就きまして、一番やりたいと思ったことが、今のお話の裏返しになるのですが、なかなか引きこもりのようになってしまったお子さん等をどう学びの場に一緒に連れて行くか、そこのところについて一番考えていたところ、今回手を挙げさせていただきました多様な学び支援コーディネーターの件で最初にお話を伺ったときに、言葉は今色々出ているわけですが、小学校にも中間教室をぜひ置きたいといった岡谷市や私ども教育委員会の願いが合致したところがございましたので、手を挙げさせていただいたところです。</p> <p>岡谷市は先程の全県の表にもございますが、かなり前から各中学校に中間教室がございます。各中学校にあって、自分のいる教室にというようなところの願いを込めた上での中間教室という言葉ですので、先程色々なお声もありますが、今後また名称については考えていかなければいけないと思います。当初はそういうねらい、願いでつけていった名前です。</p> <p>それ以外にもなかなか自校にはどうしても入りづらい、そういったお子さんたちを見て、岡谷市にはフレンドリー教室というものが諏訪湖ハイツというところがございます。そこには学校を超えて各学校の中間教室には行きづらいお子さんたちが保護者同伴で最初見学等した後、自分の力でまたは保護者の送迎によって来る、そのようなシステムを取っているところです。</p> <p>ですので、多様な学び支援コーディネーターに手を挙げさせていただいたのは、これから一番大事になっていく、小学校段階で中間教室的なものを作り、そこが自校の一つの中間教室だけでなく、他の小学校からもその学校に来ながら学びを積んでいく、自分の生き方を求めていく、そんなことを一つの願いとしてやっているところです。</p> <p>また同様に、先程の居場所の所まで子どもと共に学びを求めていく、そういったところの施策としましては、昨年の12月から岡谷市では、兼務ですが、お一人不登校支援コーディネーターとして元校長先生をお願いしたところです。その先生は、アウトリーチを主にしております。学校ではなかなか関わりが取りづらい、丁寧に取っていてもなかなか学びの方向性に結びついていけないお子さんたちを家庭訪問していただき、最初は家でその子の好きなことで遊ぶ、何か興味関心をもったことがあったら、だんだん家庭から外に連れ出ししていく、そして一緒にスモールステップで自立に向けての学びを積んでいく、そんなところを大事にしているところです。</p> <p>ですので、今日の表にもございましたが、手を挙げさせていただいた多様な学び支援コーディネーターの活動がこの7月ぐらいから始まっていくわけですが、小学校での中間教室的な場所で、そこにいかに市内の他の6校の子どもたちの居場所を作っていくか、そんなところを大事にしていきたい、そんなことを考えながら手を挙げさせていただいたところです。</p>
<p>荒井座長</p>	<p>続いて、近藤委員にお伺いします。改めて SaSaLand についてねらいをお聞かせいただけたらという点と、市町村を束ねる団体として今回のこの教育支援センターのあり方についての課題意識や状況認識等をお聞かせいただけたらと思います。</p>
<p>近藤委員</p>	<p>まず長野市の新しい教育支援センター、通称は SaSaLand と言います。七二会小学校の笹平分校が休校になっていたところを利用して開設させていただきました。市内全域対象ということで、バスを2本出して、長野駅から、中心部からも来られるようにしています。基本的には学習支援というよりも、その子らしさがそこで出せることが何かないかと考え、遊ぶ催し、できれば人と繋がるのが望ましいのですが、一人でいる場所も確保していくということで、分校のある程度広い敷地を利用しながら、遊びを中心に子どもたちが安心してそこへ来られる、そんな場所になっているかと思えます。</p> <p>現時点で登録が120名いるのですが、だいたい毎日30～40名、週1回あるいは3日。最近一番良かったなと思ったのは、ほとんど昼夜逆転していた子が、ここへ来るようになって仲間と</p>

	<p>一緒に駆けずり回り、目一杯やると非常に疲れるらしいのですが、お昼寝もして、朝早く通所していつの間にか昼夜逆転が治ってきているという子どももいます。</p> <p>やはり子どもたちが閉じこもって小さな居場所にいるよりは、ある程度広いところで駆けずり回りながらみんな遊ぶということが大事なんだと改めて思います。給食も幸い給食センターの余力があるので、その日に多少のプラス、前後が出て申し込めばほぼ対応できるので、そういう点も親御さんにしてみると安心なのかなと思います。</p> <p>今後の課題は、そういう子どもたちの色々なニーズが増えてきて 100 人来て 100 通りになったら困るなどということはあるのですが、ただ、子どもたち同士で活動してくる中でお互いにやっていくことが生まれてくるようになると、それをどう活かしていくかという支援が必要になります。今でいう個別最適化ということを文科省が言っていますが、そっちの方に繋がっていくような形になるとと思います。</p> <p>それで、これは大変難しい問題なのですが、昨日も阿部知事さんが全国知事会で、自治体同士のサービス合戦になってきているというような話をしていたのですが、まさに教育もそれが近いのではないかとというのが、長野県全体を見ていると、どここの市町村でやるからという形になってくるものですから、やはりできるだけ広域化することが必要になってくるのではないかと思います。もちろん通うことの問題はあるのですが、それも隣と協力しあいながら、あそここのところでこういう動きがあるのだけれど、少なくとも少し広域的にまとまった範囲内でこういった施設というものも考えていく時代になってきているのではないかと思います。</p> <p>学校の中もそうなんだろうなとは思っているのですが、一つの教育委員会で責任をもってやるというよりも、協力しあってやろうという方がよいと思っています。まだほんの少しなのですが、長野市がそんな試みを近隣の町村と学校問題で連携、手を取り合っていきたいというような機運が出てきているものですから、不登校に限らず、学校教育問題で連携できていけたらいいなと思います。</p> <p>子どもがとにかく多様化しているので、指導する側以上に、大学の先生以上にメタバースを熟知して、来た途端に「こんなものなんだ」って、そこまで言うてはいませんが、メタバースでこちらが用意しておいたものを全部壊してさらに作りたいというようなお子さんもいらっしゃいます。</p> <p>色々なところに施設を作って、各地でやっているのですが、幸い長野県には市町村連絡協議会というものがございまして、そこに出していただければ、様々な面で知恵を出し合っていくことができるようになっていきます。</p>
荒井座長	<p>追加で質問ですが、120 名ぐらい登録されていて、一日だいたい延べ 30 人ぐらいの利用といたした場合に、SaSaLand のスタッフはどういう方が担われているのでしょうか。</p>
近藤委員	<p>所長、支援員の方、常駐のスタッフがいます。それから行政からも来ています。現在のところ指導主事も毎日とはいかないですができるだけ関わるようにしています。</p> <p>それから、一番ありがたいのは近くに信州大学教育学部がございまして、その学生さんに協力していただいて、毎日のように来ていただいています。これが大変大人よりも、やはり大学生のお兄さん、お姉さんの方が近い感じがするのだと思うのですが、責任をもってやっていただいているのですが、一緒に活動する没入度は大人よりも学生さんの方がいいのかなと少し思います。</p> <p>やはり、同学年で色々やっていくというよりも、子どもの活動というのは異学年同士の場というのが、小学校とか中学校とか高校とかっていう、小学校だけじゃなくて、そういう活動のできるところが広がっていると、多少子どもたちの成長は違ってくるのかなということも思われます。</p>
荒井座長	<p>私が知り得た情報では、スタッフの皆さんは長野市内のフリースクールの方々から研修を受けるといった学ぶ機会もあったと伺っております。</p> <p>別件になりますが、例えば村上委員はフリースクールの皆さんとの繋がりがあがると思いますが、フリースクールの皆さんが、例えば教育支援センターに行ってみることというのはレアケースなのか、たまにあるのか。あるいは、今の広域という話でいった場合に、先程近藤委員からも話がありましたように、個別市町村単位で責任をもって、その学区内の子どもたちの学習権を保障していくというのは当然ですが、これだけ人口減少等を踏まえた場合に、むしろ総力を挙げて、圏域等で横断的に対応していくということも仕組みとして考えていく必要があるのかも</p>

	<p>れないと 77 市町村を見ていると感じる部分もあるのですが、冒頭のフリースクールと市町村の教育支援センターの関係性とか、あるいは広域の観点、この2つあたり状況認識をお伺いできますでしょうか。</p>
村上委員	<p>おっしゃる通り連携が必要になってくるというのは日々感じていて、これはお互い様だと思うのですが、向こうも僕らのことを当然人として知らなければ紹介しづらいだろうし、紹介する時もドキドキするだろうし、先程少し話したように茅野市の旧適応指導教室も勉強に割と特化して厳しいイメージが入ってきていたので、そこに行っても辛くなってフリースクールに来るようなことも実際現象としてあったので、正直少し印象が悪くてなんか怖いところなのかと思っていました。</p> <p>ただ、実際見学に行かせてもらったら、ある意味すごく熱い先生というか、この子たちが高校に行きたいと言っているのだから何とかしてあげたいという気持ちがすごく溢れている先生だったと実際会って分かったんです。</p> <p>だから、すごく大事なことだと思うのですが、幸い諏訪圏は諏訪市、それから茅野市ともに今年度に入って先程一覧表がありました、いわゆるこういう学校外の指導に関わる方やそういう学校内の中間教室の方も一堂に集まる懇談会を開いてくれることがこのところ動きとして活発になっています。</p> <p>荒井先生がおっしゃったように、長野市のような大きな人口規模、松本市のような規模のところとはやはり違って、諏訪圏だとフリースクールも含めて利用する子どもたちも越境してくるのが当たり前です、それからもう一つは現実的な話で言うと、高校受験の目指すところも当然重なるので、ある程度の共通認識、共通のルールがないと、あっちではオッケーだけどこっちではだめだというのが、やはりすごく不信感につながってしまいます。</p> <p>お互いの市町村でよかれと思ってやっても、それがさっきの「はばたき」の話と一緒に、比べられたとかいう話になって、例えば、さっき言った茅野市では比較的積極的に成績を出してくれるけれど、別のところに行くと、学校内の中間教室なのに成績がつかないという時に、例えば「はばたき」をもって行って相談すると、逆に警戒されてしまい、うちはそこに書いてあるようなことは無理だからというような感じで逆に警戒されてしまうといったことがあります。</p> <p>だから、普段から何か具体的なシビアな相談のときに行ってしまうと、親御さんの余裕がないし、支援している側も必死になっているので、やはりお互い良かれと思って使ってしまうので、今回諏訪市や茅野市が広域で、なんでもない時に支援者を一堂に会して話をする場を作ってくれたというのは、すごく期待以上の効果があったというか良かったと思っています。</p> <p>先程、今回県がコーディネーターを作ろうとしているという話は、だからまさにそういう位置付けで、市町村単位だけではなく、同じ文化圏とか商業圏をちゃんと意識したようなところに設置をしてもらって、そこに関わるフリースクールから中間教室から学校から、一緒に見られる人がいてくれると、塩尻市の小松さんのような人が各地に居てくれるとすごくいいのではないかと聞いていて思いました。</p> <p>そういう方がいないと、一人一人、一つ一つの施設は余裕がなくて必死だから、それを少し俯瞰して見られるところから、こっちはこういう特徴があるということを知ってくれる人がいるということはすごく大事だなと思います。</p> <p>もしかしたら、最初に質問したその「はばたき」と当事者の間が少し今遠い気がしているのですが、その間を埋めるのがその基礎自治体とかコーディネーターの役割で、「はばたき」だけで何とかしようと考えない方がよいという気がしました。</p>
荒井座長	<p>懇談会を開催されたという理解でよろしいですか。何かそこで、懇談会のゴールとか、何か成果物とか何か想定されていることがありますか。</p>
村上委員	<p>実は、今日岡谷市の教育長さんもおっしゃっていたのですが、諏訪市から始まった動きの中で、いわゆる居場所とか教育支援センターとか、そういう情報や相談窓口も含めて官民の情報が入ったガイドブックを、しかも6市町村のセットで作れないかということで、今一応各教育長さんから前向きなご返答をいただいているのでなんとか形にしていきたいと動いているものです。</p>
荒井座長	<p>事務局に振りたいと思っているのですが、先程来話に出てきました多様な学び支援コーディネーターの配置ということで、お配り頂いている資料の中には、今年度いくつかの市町村名が特出しされているかと思いますが、まだ走り出そうとしているところかと思いますが、先程の岡谷</p>

	<p>市さんの事例以外にはどのような特徴をもっていらっしゃる事例なのか、こういう期待感があってということがあれば、少しご紹介いただけたらと思います。この事業の全体像も含めてですが、その点はいかがでしょうか。</p>
事務局	<p>岡谷市さん以外の4つの市町村ですが、県教育委員会の考えとしましては、教育支援センター自体がない市町村に新たに作る、または増やす、そこを支援したいという思いもありまして、そこに合致しているのが佐久市と山ノ内町です。メタバースになるかどうか分かりませんがICT を使ってアウトリーチ支援に取り組んでいただけそうなのが松本市です。そして先程から話題に出ております広域連携、市町村連携ですが、昨年来、市町村連絡協議会の会合等で県教育委員会も出させていただく場面で、小さな町村がやはり自分たちだけでは教育支援センターを作る力がないというところで、モデル的にお願いしたのが下伊那の下條村です。ですので、下條村さんには自分の村だけではなく、近隣の町村とぜひ連携して運営をやってほしいということをお願いしております。</p>
荒井座長	<p>それぞれ特徴がありますので、その進捗状況を皆さんと共有していただきながら、もっと深く知りたい部分や特出しすべき点というものの輪郭を描いていけたらと思っております。</p> <p>今、教育支援センターのあり方ということで、現状を共有してきたわけですが、鳥谷越委員、今どちらかという義務教育の話が多かったのですが、逆に県直轄の県立高校としてはこういう点はすごくいいなということや、県にフィードバックしたいという点、あるいは県の不登校支援の実情といいますか、状況がどのようなものなのか、実はこの懇談会は、これまでどちらかという義務教育中心の議論が多かったということもありまして、現在地を少し教えていただけたらと思います。</p>
鳥谷越委員	<p>私自身がずっと高校で教員を三十数年やってきて、もちろん高校に入ってくる段階で不登校を経験したお子様も様々出会ってまいりましたが、中間教室と言われるもの、それからフリースクールの方、それから地域の方のご努力で、これだけ皆さんが子どもたちのことを思って色々やられてきているということは、実は今日この1時間ぐらいの話の間で初めて知ったというか、初めて触れたというか、そんな感覚をもっています。</p> <p>もちろん高校に入学してから、それぞれの個々の生徒さんたちの対応、それから保護者との対応は丁寧にやらせていただいておりますが、どのようにこの子たちが様々なことを経験し、苦勞して、どんな思いだったかということまでは、実は高校に入ってから踏み込んで聞くということが私自身も担任をもっていた時にあまりなく、むしろ高校に入ってから応援していく体制の方が多かったので、今日は本当に勉強になるというか、知らないことだらけというか、校長の立場でありながら本当にいけないことなのですが、ぜひ例えば高校の教頭が一番の窓口になるところですが、そういう教頭の研修や、あるいは高校の教員の初任者研修とか、そういうところにこういう話が組み込まれているかどうかわからないのですが、皆さんがご苦勞されてきている現状があるということを高校の教員に知らせたいと、すごく今そんな思いをした1時間でありました。やはり知らないことが多すぎます。その上に立って高校の教育があるのだということは、ぜひ知っておくべきだと思っております。</p> <p>私から今の段階で発言できることとすれば、高校でいただいているお子さん方で、中学校小学校の時に不登校を経験されたお子様でも、やはり環境が変わると大きく変わる子もたくさんいらっしゃいます。たくさん見てきました。</p> <p>むしろ高校の現場で、今やはり不登校と言われている生徒さん方は後天的なものというか、高校に入ってから進路に悩み、やはり16歳から18歳までの親との関わり方、それから社会との接点の見出し方、将来の不安、そういったもので勉強についていられない、あるいはできない自分を責めるとか、真面目が故に小中は全くそういうことはなかったのに不登校になるというお子さんの方をたくさん見ています。</p> <p>高校の場合は勿論出席の日数等がカウントされていくので、なかなか欠席がかさんでいてしまいますと、ここまでの段階では進級、それから卒業というのが難しかったこともありますが、私たちも最後の最後までお子さんや保護者の方と語り合いながら、違う道もあるということも含めながら、現在の段階ですと通信制ですとか定時制ですとか、本当に最近ではN高校、S高校といった本当にメタバースの中で単位を取れていく、そしてそこから将来へ向けて大学への進学、就職等につなげていく生徒さんもたくさんいますので、高校ではその多岐にわたる学びが用意されているという現状が、今までは用意されてきているということはあると思います。</p>

	<p>私たちは現在4月から、多様なニーズの学びに対応してということでこれからもやっていきますが、そろそろそういった生徒さんたちに対してもオンライン授業の提供やそういったものが始まってきている状況に各学校なっているのではないかとあります。文科省から4月1日からということで、各現場はとても困っているといえますか、どのように対応していけばいいのかということは、前例がないもので、色々試行錯誤しながらということでしょうか、また今後の様子を色々勉強しながら進んでいくことかと思っています。</p> <p>これは次の議題にもなるかと思いますが、私のここまでの感想も含めてお話をさせていただきます。</p>
荒井座長	<p>今、鳥谷越校長先生が話している時に、村上委員が拍手されていました。高校の状況に対する思いやその意図を少しお伺いしたいと思います。</p>
村上委員	<p>本当にうるうるするぐらい良かったというか、やはり知らないことを大人がもっと知らなきゃいけないと痛感して、僕も色々な高校の先生とお話することもあるのですが、中学まで無理だったから高校も無理じゃないか、良かれと思って、つらい思いをするぐらいなら最初から通信制高校でいいのではないかといいことを言われることが非常に多いですね。</p> <p>だけど今、鳥谷越先生がおっしゃっていただいたように、実際高校に行ってから頑張ってる輝いているという子もたくさん知っていますし、すごく鋭い指摘だと思って、実は逆に小中とかすごくいい子とかすごく頑張っていた子に限って、高校で急に辞めちゃったという話を、僕は進学塾もやっているの、えっというパターンも実は増えているような気がするんです。</p> <p>だから、僕はこの不登校に関する活動をしている中で、高校の先生たちにも不登校の問題を考えてほしいということやずっと一つのテーマとして、義務教育だけの問題のようにとかく気がちな気がしていて、そこを全員とは言いませんが、県内の多くの高校の先生方にも、今回テーマにも啓発活動とありましたが、非当事者を含む高校の先生に理解してもらおうという活動がもしここから広がっていったら、とてもうれしいなと思って、思わず拍手をしました。</p>
荒井座長	<p>つまるところ、学びの場というものをどういうふうに関心安全な場にしていけるかというテーマだと思います。学校であろうが教育支援センターであろうがフリースクールであろうが、居心地がいい中で自分らしく学べるということが至上の価値だと思うのですが、例えば現場を預かる高坂委員に振りたいと思いますが、その要素とか心がけていらっしゃる等あればまずお伺いしたいと思います。</p>
高坂委員	<p>本当にそれは、少し学校から足が遠のいている生徒たちだけでなく、今本校で職員とテーマにしているのは、本当に誰一人取り残さないということを共通理解しながら進めているわけですが、非常に丁寧に寄り添って個別に支援をしていくことはもちろんなのですが、本当に学校の命題である、授業の中で学力差ということはもちろんありますが、それによって授業というもののあり方が、それぞれの子どもたちがもっている思いや考え、それからどう考えていくかということややはり教職員が一つ一つ大事にして、その子たちをどう活かしていくかということや一生懸命今学んでいるところです。</p> <p>それから、やはり市の教育支援センターはもちろんなのですが、地域の中でもそういう地域の子どもたちを地域で大事にして育てていこうという、そういう意識をもっている方々がたくさんいらっしゃって、学校は四角い教室の中だけで学びをするのではなくて、学校という建物の中だけで学ぶのではなくて、地域にどんどん出て行って、色々な方と関わりながら子どもたちがそれぞれもっている可能性を伸ばしていける、そのような場を学校としても考えていかなければいけないということは、常に検討しているところです。</p> <p>先程、鳥谷越先生のお話を聞いて本当にありがたいと思ったのですが、今やはり中学校で不登校の生徒たちを支援していて、保護者もそれから当事者の生徒も、そして私たち教職員もやはりいつも少しつまづくとかぶつかるのが、高校に入学した後どのようにこの子を見てもらえるかということが正直不安に思うところです。</p> <p>どうしても選択肢としては通信制だったり、多部制だったり、そういったところに力を入れている私立であったり、そういう選択肢しか子どもたちには現状なくて、本当に現実どこの高校でも、生徒たちが希望していった進学先で、やはり小学校中学校、継続して高校の先生たちに理解していただきながら、それぞれの子どもたちを本当に支えていただけるような環境ができれば本当にありがたいと思いました。</p>
荒井座長	<p>小松委員、教育支援センターあるいは元管理職の立場も含めてこのテーマについてご意見</p>

	<p>いただきたいのですが、いかがでしょうか。</p>
小松委員	<p>とても思うのは、周りの大人のこうあるべきだとか、そういう価値観から子どもたちを取り除いてあげたい。学校の教員も、教育支援センターの評判とかイメージが悪いというのは、私もわかる気がします。こうあるべきだと、子どもはこういうふう支援していくのだという強いものを持っている方こそ、自分も人のこと言えないかもしれないですが、子どもに発破をかけるのですが、それが子どもを追い詰めていることに気づかないことがあります。例えば高ボッチ教室に昨年来た子で、学校が怖いということで来始めたのですが、一日中ずっとジグソーパズルをしています。ジグソーパズルをしていて、疲れちゃうのではないかと心配で、私もちょっと声をかけると「気持ち落ち着くんです」と言うんです。ならばと思い、ずっとそのままにしていきました。その姿がもう1か月ぐらい経つてくると、今度は好きな絵を描き始めました。同じようなタイプの女の子がいて、その子とコミュニケーションが取れないのですが、私が間に入ってオセロをやったり、お互いの絵の作品を見せ合ったりすることをしながら、ちょうど今ですが、じゃあ2人で合同制作を作ろうということで、大きな模造紙に何か好きな絵を描いて高ボッチ教室に飾ろうと言ったら、それを基にコミュニケーションが2人で始まるんです。</p> <p>とてもコミュニケーションが取れるようなお子さんだと思っていなかったのですが、ああいう絵を描こう、こういう絵を描こうと決して賑やかでないのですが、コミュニケーションをとりながら笑顔が見られるようになりました。</p> <p>だから、やはり自分らしくという点で言えば、まず大人のそういう「こうあるべきだ」というものを取り払って、その子どもそのものの今の姿を認めてあげること。あと、その子のもっているニーズ、やりたいことを、この子は何で夢中になれるのか、なかなか私もわからないことがいっぱいありますが、そういうものを見出すこと。よく学びの心に火を灯すという言葉がありますが、先ほどお話しした子も、私はほとんど関わらないのですが、「じゃあ一緒に作ってみるか」「じゃあ模造紙何色がいいかまた教えてね」というようなことだけ言っておくと、会話が始まるんです。子どもたちのやりたいことを思いっきりやらせてあげて、それが広がっていくような、そういう周りの伴走という言葉を使いますが、大人ができればいいかなとすごく思います。</p>
荒井座長	<p>ありがとうございます。甘利委員はいかがでしょう。</p>
甘利委員	<p>今とてもいいお話をたくさん聞き、ワクワクしながら、高校に進学していく子たちを思い浮かべながらいました。自分らしく学べる場所とは、しっかりと遊んでくれる人材がいるかどうか、遊んでくれる、また、その子に一生懸命関わってくれる指導者、第三者、お兄さん、お姉さんであり、そういった存在の人から活力を得て一生懸命遊ぶ中から学びを得て、元気になって次のステップへ上がっていくということが大事だと思います。</p> <p>やはり高校進学を目的とする中学3年生ぐらいの子どもたちは、できれば静かな環境で学べる時間がほしかったりするんです。そういった環境を整えられる自治体であってほしいと思います。</p> <p>進学していくという目的をもった子どもたちが学べる場所が、なるべく静かな環境にあった方がいいと思うので、遊ぶ場所、学べる場所、ICTで授業を受けられる場所と確立した場所が必要だと思います。</p>
荒井座長	<p>支援者としては、人権理解が問われているということでしょうし、その学び手を中心とした学習環境をどうやって整えていけるのかという意味では、まさに不登校支援というのは個別最適化以外の何物でもないと思います。</p>

<高等学校における多様な学習ニーズへの対応について>

荒井座長	<p>次に「高等学校における多様な学習ニーズへの対応」について、委員の皆様の受け止めをお伺いします。</p> <p>まず冒頭、鳥谷越委員、すでにこの通知が出る前から、学校の先生方はそれぞれのお子さんに寄り添いながらできること、為し得ることをやってきているというのが実情ではないかと思いますが、この通知のインパクトやその前後の状況等お聞かせいただいて理解を深めたいと思います。</p>
鳥谷越委員	<p>先程も申し上げましたように、やはり子どもたちによっては、受験のプレッシャーとか、そういうことでできない自分を責め始めたり、できて当然なのになぜできないのだろうと葛藤したりしながら、学校に来られなくなるという生徒が多く見られるような場面がありました。</p>

	<p>特に、私が本当に今までもなんとかならなかったかと思うのは、3年生の卒業間近に控えた頃に、もう欠席がオーバーしてしまって、なんとか学校に来て欲しいと思うのですが、正門まで来ると足が動かなくなってしまう子も今までいました。そういう生徒さんにとっては、今回のこういうものというのは、来たくても来られない、あと少しで卒業が迫っているということに対して、次のステージを見せてあげるためにも、オンライン等の授業によって出席に変えるということができるようになると、後半に言った生徒さんも、本当に3年生にはものすごく救いの制度だということはお思っております。</p> <p>反面、例えば1年生等にあつては、早い段階からもうすでに学校はダメかな、全日制あるいはたくさんの人の中に入るのはダメかなという子どもに対しても36単位までしか取れないということになると、1年間限りの制度だから、それでも1年間これをやって次のステップにつなげればいいということでもし仮にいったとして、2年生になって来られるようになると思うととても嬉しいことなのですが、これが継続してしまって、2年生でもこの制度が使えるかというのは、これがもうダメだとなると、そうか、そういうことかということもあります。</p> <p>色々問題も抱えていて、現場とすると今コロナの産物でオンライン授業がもう当たり前のように出来るようになりました。先生方も双方向型でカメラやタブレットを設置して配信するということは、本当にコロナによって、だいぶできるようになりました。</p> <p>ただ、通信教育やオンデマンドで自宅で学んだものを単位にしていくということがやはり私たちは経験がないので、通信制と併修したりして出席とみなしていくということまではとても難しく、これは県のご指導をこれから仰ぎながらやっていかないと難しいところかと思っております。</p> <p>これで2か月が過ぎましたので、30日の欠席ということが出てきている生徒もちらほら出てきております。そういった生徒には、こういう制度を使って周知して、なんとか学びを継続させて退学や転学することなく卒業へいかれば良いと思っております。そんな、今6月の中旬ぐらいの高校の現状です。</p>
荒井座長	とても実情をよく理解することができました。他の委員の皆様、おそらく初めてこういう状況なのかということを知った方も含めていらっしゃるかと思います。他の委員の皆様いかがでしょうか。
村上委員	事務局への質問になるかもしれないのですが、教育支援センターや保健室とかオンラインが可能な場所として色々な場所が書いてあるのですが、後ろの方で別の括りなのだと思うのですが、不登校の場合、自宅等での受講というような話が出てきたのですが、フリースクールだけ無いと思うのですが、フリースクールでサポート的な役割が通信制高校ではよくあるのですが、そこは「等」だから含まれていると考えていいのか、それともそこはあえて何か外す意図があるのか、通信制と何か線を引くとか、もし分かれば教えてください。
荒井座長	ご質問ありがとうございます。この点、事務局いかがでしょうか。
事務局	自宅以外の場所ということですので、フリースクール等も当然含まれると理解しています。
荒井座長	改めて、この通知文も含めて内容確認が必要かとも思いますし、どちらかというフリースクールの存在というのは義務教育段階の方が多かった中で、また新たな機能を果たし得るということも、もしかしたらフリースクールの皆さんの中でもこの通知を経て情報共有しておくことは比較的重要度が高い部分ではないかと思っております。
小松委員	<p>勉強不足の点もあって、一つは中学校等の現場でも、不登校のお子さんが学校に行けないので、オンラインを使って授業を見て当然出席扱いにはなるのですが、評定という部分ではまだまだ課題を残している部分があるのですが、そういった点、高校で36単位ということですが、オンラインで出席扱いになり、当然高校ですから試験みたいなものがあると思うのですが、そういったことでその単位がオンラインでやったけど成績の方が芳しくなく単位が取れなくなるということがあるのかと素朴な疑問でいけないのですが、それが一点。</p> <p>あと、これも私の勉強不足でいけないと思うのですが、病弱児です。病気療養児も、もう少し早い段階から高校でICTを使って単位認定がされるというようなことを読んだ記憶があるのですが、そういったところも病気ということと不登校ということに何かギャップというか、不公平感みたいなものも、色々なところで話題になっているようなこともあると思うのですが、そういったところを教えていただければありがたいと思いました。</p>
荒井座長	お配りしている資料6の冒頭に、不登校児童生徒等という対象になっておりまして、不登校児童生徒といわゆる病気療養中の方というのは建て付けとしては分けている。あとは、その他

	<p>特別の事情を有するという、これは国の文言としてはよく使う「その他」というところですが、今ご質問いただいた点、事務局では何かわかる点等対応いただける部分がありますでしょうか。</p>
事務局	<p>まず、最初の単位認定の件に関しましては、小松委員が今話された通り、例えば高校でも毎日学校に来ている子でも単位認定されない場合もありますので、それと同じようにオンライン授業を受けたこと、そのことと単位認定というのは全く別のことです。</p> <p>それから、病気療養中の生徒の件は、この資料のところにも記載がありますが、不登校生徒向けの今回の改正と、病気療養中の生徒等への支援の部分というのはまた別で、同じ遠隔授業ということの部分が入ってくるのですが、別の扱いということになっています。</p>
荒井座長	<p>また引き続き私たちも学び、理解を深めないといけないなという部分かと思います。</p>
近藤委員	<p>お答えいただいたように私も解釈はしているのですが、かつて義務の段階も私が教員になりたての頃は、病気の子が半年以上休めばだいぶ厳しく出欠席をやっていたのですが、今こういう時代になってきて、義務の方はその辺がだいぶ緩和されてきて、出欠席は関係ないとか、最近、悪い言葉で言えば、入学年齢が来てその学校に在籍して卒業年齢がきてその学校から卒業できるなんていう事態も起こっています。</p> <p>だから、どこでどう学んでいくのかということにもう一度視点を当てた場合、恐らくだいぶ高校でその辺は努力してきていただいていると思うのですが、どんな学びを子どもがしているかという、やはり個別のところ、個別最適化は大変難しいのですが、考え方が今後変わっていくのではないかと、文科省がその第一歩を切ったのではないかとというのが私の感想です。</p>
荒井座長	<p>そろそろ時間ではありますが、皆さんいかがでしょうか。何かご質問やご意見、ご感想等ありますでしょうか。</p>
甘利委員	<p>今年の4月1日から始まった制度で、保護者からすると、単位に泣かされてきた保護者、お子さんをたくさん見てきました。一生懸命受験して意気揚々と高校に行ったのですが、1か月で行けなくなってしまい、退学せざるを得ず、通信制高校に転校をし、3年までというお子さんもいて、お母さんたちは色々な悩みを抱えています。</p> <p>こんなに良い制度ができたのだとすれば、先生方、校長先生、高校の先生方にしっかりと研修等を組み込んでいただき、しっかりと周知をしてもらいたいです。保護者も知るべきだと思います。</p>
荒井座長	<p>本日いただいたご意見を踏まえて、「はばたき Vol.3」に向けて、事務局でたたき台を作成させていただけたらと思っております。そのことを踏まえ、それぞれ皆さんご所属、あるいは関係のあるネットワーク、つながりの中で、その内容について精査していただいて、次回またご意見をいただこうと思っておりますので、よろしく願いできればと思います。</p>